



あれから10年

AC10年を迎えた今年度、本学会の大会は、初めてメタバースで行われた。かつては横浜や神戸、京都などの会場で、当然のようにリアルに大勢の人が集まって開催されていたが、COVID-19パンデミックを機にWeb開催という方式が始まったのは記憶に新しい。当初は“仕方なく”といった雰囲気もあったが、オンライン会議などが日常的になるにつれ、リアルに集まる大会には無いメリットも目立つようになり、コロナ禍が終息してからもWeb開催やハイブリッド開催という形態をとる学会が多くなった。ちょうどその頃、某SNS企業が本格的に力を入れ始めたことで、メタバースすなわちインターネット上に構築された仮想空間が広がっていった。私は今回初めてメタバースの大会を経験したが、Web開催と呼ばれていた形式よりも格段に臨場感が増し、シンポジウムも一般口演もポスター発表も、リアルに集まる大会と遜色ない、いやそれよりも視覚・音響効果にすぐれた発表会であった。多言語の同時翻訳も著しく進歩したため、日本語をメインとする国内学会にもかかわらず、諸外国から多数の海外研究者が参加した。企業展示にはいろいろな工夫が見られ、エンタメ要素も溢れていた。懇親会では、参加者が思い思いのアバターで会話を楽しみ、意外な繋がりや共同研究の機会が生まれたという話も聞いた。リアル懇親会での新たな出会いは自己紹介から始まることが多いが、メタバース懇親会では科学的興味の情報だけがバッジに書かれた匿名アバターで会話を始め、盛り上がってから顕名にする（場合によっては匿名のまま去る）という部屋などもあり、職位や年齢などを全く気にせず話し始めるという試みも面白かった。

今回の大会でも注目度の高い発表は数多くあった。なか

でも、生化学の基盤の一つであるタンパク質化学の進歩はすさまじい。そのきっかけになったのは、コロナ禍の真只中であった2021年の夏に公開された高精度タンパク質立体構造予測プログラムAlphaFold2であろう。従来のプログラムに比べて飛躍的に優れていたため、興味あるタンパク質の構造予測を試した研究者の多くが驚愕した。筆者の身近にいた構造研究者も、最近自分で決定して、まだ類似構造が世に出ていないにもかかわらず、細部までドンピシャで当てられたと衝撃を受けていた（実話）。その後まもなくタンパク質創造プログラムAlphaDesignが発表されるなど、私の想像を超えるスピード感で発展した。今では、生体物質の任意の部位に結合するタンパク質をデザインできるようになり、実験ツールや医薬品として大活躍してきた抗体の役割は終わった。ウエスタンブロッティングやELISA、顕微鏡観察、FACSなどの実験は今でも日常的に行われているが、抗体の代わりにin silicoでデザインされたartibodyを利用することが普通になってきた。まるでCRISPR-Cas9でDNAを編集するようにタンパク質の狙った位置を切断したり、特定のアミノ酸残基を修飾したりといった人工酵素designaseの創造も容易になり、様々な疾患の治療や予防に役立っている。

今後はメタバースの大会が普及していくと予想されるが、やはりそれでは済まないのが人間社会である。特に本学会には8つの地方支部が存在し、年に1回の支部例会では会員がリアルに集まって成果発表と討論を行っている。夜になれば、2021年頃には忘れかけられていた乾杯！の言葉が懇親会場で響き、その後の熱い討論や愚痴の言い合いなどが近くの店で夜中まで続く。

さて、冒頭のACはご想像通りafter coronaであり、ここに書いたことは単なる妄想である。AC10年が今から10年後にやってくることを祈りつつ、その頃の大会の姿を想像してみた。もっといろいろ妄想してみたが、あっという間に字数制限をオーバーしたので、ここで終了。さて、根拠は無いけれど第6波は来ないと期待しながら、今日の仕事の続きをしよう。

(KK)